女王と海賊

暁の天使たち５

茅田砂胡
Sunako Kayata

NOVELS Fantasia

立ち読み専用

口絵　鈴木理華
挿画
DTP　ハンズ・ミケ

1

スクリーンの中に派手な花火が咲いた。
古風な型の戦闘機が小惑星に向かってさっきからミサイルをぶっ放し、容赦ない銃撃を加えている。
結果、小惑星の中から合金らしい人工物が現れた。
これを掘り出すための攻撃だったのか、戦闘機は攻撃をやめて小惑星に衝突しかねない勢いで急激に接近し、操縦者は機を捨てて飛び出したのである。
その様子を惑星ティラ・ボーン――通称連邦大学惑星に点在する校舎の一室で、四人は眼を丸くして見つめていた。
いつの間にかデモンの姿が見えなくなっているが、彼らはそのことにすら気づかなかった。
「無茶をやるもんだ。――あれがその船か？」
リィが呆れたように言えば、ルウも呟いた。
「ほんとだ。うまいね」
嚙み合わない会話だが、ルウが感心していたのは操縦者の技倆だった。
ミサイル発射後ためらいなく銃撃に移った反応の速さといい、精度といい、さらにはあっという間に小惑星ぎりぎりに接近した流れるような動きといい、手足同然に機体を操らなければ到底不可能なことだ。
数十年前に製造された機体であることを考えると、この操縦者はかなりの凄腕だ。
機体を制御する重要な部品である感応頭脳は年々めざましく進歩しているが、言い換えれば十年前の頭脳でさえ、現在の製品とは比べものにならない。
五十年近く前のものとなれば、その性能の程度も融通の利かなさも推して知るべしだ。
ここにいる顔ぶれの中ではルウの他にもう一人、

ダンもそうした事実を知っている人間だった。
同じく感心して、独り言のように呟いた。
「誰が操縦しているんだ？」
「おれもそれが知りたいのさ」
リィが言って相棒を見たが、ルウは応えなかった。
相変わらず独り言のように呟いた。
「軌道が変わった――防護衛星に見つかるね」
初めてスクリーンの映像に興味を引かれたらしいダンが言う。
「そもそもこの宙域はどこなんだ？」
「アドミラル星系、本星のすぐ傍だよ」
相変わらず呟くようにルウが答え、聞いたダンはわずかに顔色を変えたのである。
「アドミラルだと？」
一方、その横では学生二人が顔を見合わせていた。
「確かこの前、習ったよな？」
「はい。それこそ、ジェムが言っていた巨大財閥の本拠地ではありませんでしたか？」
「そのはずだ」
今は髪を黒く変えている二人の金銀天使もまた、黒い天使にもの問いたげな眼を向けた。
内線画面の視点はさっきから変わらない。
一定の距離を取ったところから戦闘機と小惑星を映している。一度も大写しにはならない。
操縦席を飛び出した人の姿もほんの一瞬、小さく映っただけだった。すぐに小惑星に埋もれた船内に消えてしまった。
リィが言う。
「船の中は映せないのか？」
「今はだめ。せめて彼女が起きるまではね。無断で覗くことになるもの」
「彼女って、奥さんはもう起きてるじゃないか？」
「違うよ。ぼくが言っているのはあの船のことだ。正確にはあの船の感応頭脳のことだよ」
この言葉にダンが頷いた。船を女性に喩えるのは船乗りなら普通のことだからだ。

「感応頭脳まで非稼働にしてあるのか？　ずいぶん徹底した停船だな」
「だけど、もうすぐ防護衛星の攻撃が来る」
ここで画面が変わった。
アドミラル本星に近づく異物を片端から撃破する防護衛星の姿が大きく映し出された。
地表から見れば眼に映ることもない小さな星だが、画面に大写しになると大変な威容を誇る姿である。
半ば自動で動く防護衛星は、既に問題の小惑星を本星に重大な被害をもたらす異物と認識して、攻撃態勢に入っている。小惑星が射程圏内に入った途端、集中砲火を浴びせる構えだ。
ダンが少しばかり顔色を変えて言った。
「今、中に入った人間はこのことを知らないのか？　あれの直撃を食らったらただではすまんぞ」
彼は辺境宇宙を旅する船乗りだ。
一つ間違えば命を落とす過酷な環境を飛んでいる。だからこそ、救難信号を探知したら何を置いても急行する、助けられる者なら必ず助ける。
そういう信念の元に生きている人間だった。
さらに言うなら、専門家であるだけに、完全停止状態の船を稼働させてもすぐには動けない、実際に飛べるようにするまでには、ある程度の時間が必要不可欠だということもよく知っていた。
そして恐らくは、小惑星に埋もれている船が動き始めるより先に防護衛星が攻撃を開始することもだ。
これは断じて見過ごせない。相手が誰であろうと、たとえ見ず知らずの人間でもだ。目前に迫っている危険を知らせずにむざむざ死なせるなど、ダンには許しがたい事態だったのである。
「ルウ。おまえがどんな怪しげな方法でこの映像を映しているのか俺は知らないし、興味もない。だが、この映像が現実なら黙っているわけにはいかない。あの操縦者に今すぐ避難を勧告しろ」
ところが、髪を長く伸ばしたルウはゆっくり首を振った。

「言っても無駄だよ。あの奥さんは、避難はしない。第一、奥さんはもうその危険を知ってるよ。留守番役に聞いたはずだから」

今度はリィが首を傾げた。

「それでも船内から逃げようとはしない？」

「逃げないだろうね」

「船と一緒に木っ端微塵になってもか？　それじゃ、自殺じゃないか」

「どうかな？　さっきの様子からすると、奥さんは死ぬ気なんかさらさらないみたいだよ」

「馬鹿なことを言っていないで早く避難を勧告しろ。防護衛星が攻撃を開始するまで、もう時間がない」

さらに緊迫したダンの言葉にも、ルウは苦笑してまた首を振った。

「無駄だと言ってる。誰にだって、命と同じくらい大事なものがあるんだ。奥さんにとってはあの船がそれなんだよ」

「当然だ。船乗りなら誰だって自分の船が命なんだ。しかし、それも時と場合によるんだぞ」

「あれはただの船じゃない。奥さんの船でもない。あれは彼の相棒であり、彼の分身であり、ある意味、彼自身でもある船だ。あの船を見殺しにすることは彼を見殺しにするに等しい。さすがに奥さんだね。他の誰よりその事実を知ってるんだよ」

「ルウ！」

「やめろ。見ていればわかることだ」

ますます血相を変えたダンを制しながら、リィは画面に目線を戻した。

迫りつつある小惑星に向かって、攻撃衛星の砲が角度を変えている。ミサイル発射口が開いていく。

発射まで秒読み段階に入ったのは明らかだった。

一方、ジャスミンは固唾を呑んでいた。

合言葉を入力してから内線画面が起動するまでに掛かった時間は実際にはほんの数秒に過ぎないが、その時のジャスミンには恐ろしく長かった。

永遠にも等しいように感じられた。
何と言っても、攻撃されるまで時間がない。
（まだか、まだか、まだか……！）
そればかり気にしていたから、操縦室の計器類が軒並み生き返ったのも眼に入らなかった。
ただひたすら、何も映さない内線画面を見据えて、はらはらしながら手に汗を握っていたのである。
そして、その画面にようやく、待ちに待った顔が現れる時が来た。
美しい顔だった。
やわらかく波打つ長い金髪、きらきら輝く青い瞳、匂うような薔薇色の頬をした表情豊かな若い女の顔——ジャスミンが最後に見た時から少しも変わっていない魅力的な顔だった。
画面の女性は操縦室に立つジャスミンを認めると、その青い眼を見張って、にっこりと笑ったのである。
「おはよう、ジャスミン。また会えて嬉しいわ」
口先だけではない。その声にも、表情にも、真実、再会を喜ぶ心情が籠められていたが、ジャスミンは憤然と言い返したのである。
「遅い！」
これには内線画面の美女が呆れた顔になった。
「相変わらずね、あなた。言っておきますけどね、あなたには一週間しかたっていなくても、わたしがあなたの顔を見るのは四十年ぶりなのよ。もう少し感激にひたらせてくれてもいいじゃない」
「そんな無駄話をしている暇はない！　ミサイルが来るぞ！」
「知ってるわ。眼を閉じて、何かにつかまって」
画面の美女が言った途端だった。
宇宙を映す外部スクリーンが真っ白に光った。
対エネルギー防御が作動したのである。
この船を——正確にはこの船が埋まっている直径五百メートルもの小惑星を狙って防護衛星が放った二十センチ砲の砲撃がその防御にはじかれ、巨大なエネルギーの束が眩しいばかりの閃光を発したのだ。

一瞬でも防御が遅れたら、この船など跡形もなく消し飛んでいただろう。

もちろん、飛んできたのはビーム砲だけではない。三十発を越えるミサイルが襲いかかってきたが、それらもことごとく目標から逸れて爆発した。

抜群の精度を誇る防護衛星にしては信じられない失敗だったが、それも内線画面の美女――この船の感応頭脳、ダイアナ・イレヴンスの仕業である。

そのダイアナはちょっと不満そうに訴えた。

「ジャスミン。いつものことだけど、あなた、少しやりすぎよ。何も軌道が変わるほど派手にわたしを撃たなくてもいいでしょう。せっかく上手に隠れていたのに、これじゃあアドミラル管制にわたしの存在を宣伝してやったも同然だわ」

「勝手なことを言うな！」

ジャスミンはまだかんかんに怒っていたが、我を忘れてはいなかった。冷静に問い返した。

「おまえは眠っていたはずだぞ。わたしがこの船を撃ったことをどうして知っている？」

「あなたにしては意外に合言葉に手間取ったことも知っているわよ。再起動と同時に、目覚まし時計の情報をわたしに転送するように設定しておいたから。第壱号、第参号の情報転送はすでに完了している。これで彼らの見聞きしたことはわたしの記憶だわ」

さすがはダイアナで、眠っている間の遅れを取り戻す手段も抜かりなく講じていたらしい。

そして、五年分もの記録を一瞬にして取り込んでしまったのもダイアナならではだった。それだけの情報量を吸収するには普通はもっと時間が掛かる。

「あとは第弐号だけど、あらあら、面倒なところへ持って行かれたわね。どうしようかしら？」

肉体を持たない美女は画面の中で首を捻り、一方、ジャスミンはほとんど歯ぎしりしながら言っていた。

「ダイアナ。おまえにはわかるはずだ。あの男は今どこにいる？」

「反応信号に間違いがなければ、第弐号と一緒よ。

つまり連邦情報局の秘密基地ね。——どうする？」
「どうもこうもない。すぐに行くんだ。何が何でもこの手でぶん殴ってやらなくては気がすまん！」
右の拳を左の掌に叩きつけて忌々しげに言ったジャスミンを見て、ダイアナは意味深に笑った。
「それ、彼もきっと同じことを言うわよ。あなたが何も言わずに黙って眠ってしまったって、ずいぶんお冠だったから」
「それこそこっちの言いたい台詞だ！」
憤懣やるかたない調子でジャスミンは叫んだ。
「おまえもおまえだ！　なぜ、こんな馬鹿な真似を許したんだ⁉　前々からおかしいのはわかってたが、回路のどこかがいよいよ本当にいかれたか！」
内線画面の美女は両手を頬に当てて悲鳴をこらえ、上目づかいに訴える顔つきになった。
「ひどいわ。わたしを責めないでよ。わたしは彼の持ち船なんだから、持ち主に逆らったりできるわけないじゃないの」
宇宙船のもっとも重要な装置である感応頭脳が、船の所有者の意志に従うのは当然のことだったが、ジャスミンはそんな言葉に騙されはしなかった。
さらに猛然と追及した。
「こんな時だけ可愛らしく振る舞うんじゃない！　わたしがあの男と結婚したのは、間違ってもこんなことをさせるためじゃないんだぞ‼」
苛立たしげに真っ赤な髪を振って唸る。
「一年のはずだった。それが五年に延びただけでも申し訳ないと思っていた。その償いにするつもりで財閥のすべての権利を譲ったのに——それなのに、四十年だと‼」
ジャスミンの怒号は凄まじかった。
操縦室内にびりびりと響き渡ったが、ダイアナはこんなことには慣れているのか、あるいは元の持ち主の性格を反映しているのか、けろりとしていた。
「それはあなたらしくもない台詞だわ。あなたにはわかっているはずよ。誰だろうと、彼に自分の意に

添わないことをさせることなんかできない。たとえ連邦警察のお偉方でも、それどころか連邦主席でも。だから、あなたがどんなに気に入らないとしても、今度のことは完全に彼の意志よ」

ますます血相を変えて怒声を張り上げようとしたジャスミンを制して、ダイアナは言った。

「それにね。四十年で済んだのなら物怪の幸いよ。あなたも知っての通りアーニィは百年という時間を見込んでいたんですからね」

「そのアーニィはどうした⁉」

「亡くなったわ。もう、十三年になる」

ジャスミンは怒気を収めて、深い息を吐いた。

恐らく、その答えをうすうす察していたのだろう。

押し殺した声で、さらに訊いた。

「……イザドーは？」

「同じよ。亡くなったわ。やっぱり十三年前だった。

――ジャスミン、あれから四十年が過ぎているのよ。あなたの知っている人で今も生きている人はほんの一握りなのよ。そして五年前に、彼も死んだの」

「だが、生きて戻ってきた。あのみょうちくりんな生き物はそう言ったぞ」

「そうよ。わたしの探知機が感じるこの反応信号が真実のものなら、彼は確かに生きている。あの人が奇跡を起こしてくれたんだわ」

「だったら、くだらないことをしゃべっていないで、さっさとあの男のところへ行ったらどうなんだ⁉」

「いいわ。仰せに従うとしましょう。今のわたしはあなたの船ですからね」

茶目っ気たっぷりにダイアナが言った途端だった。

軽い振動とともに、まだ船体のほとんどの部分を覆っていた小惑星に大小の亀裂が入り、砕け散った。

さすがにミサイルの大群を躱し、二十センチ砲の直撃をも跳ね返す船である。あっという間に邪魔な外装を払い落として、本来の姿を現したのだ。

「飛ばすわよ。席について」

操縦席を眼で示してのダイアナの言葉だったが、

ジャスミンは立ったままきっぱりと言った。
「断る。わたしはまだ死にたくない」
何とも唐突な、物騒な台詞だったが、その確信がジャスミンにはあった。ダイアナは自分の操縦者を自分で選ぶ。しかも操縦者に求める技術水準の高さ、その審査の厳しさは並大抵のものではない。
かく言うジャスミンも、小型機の操縦にかけては誰にも負けない。少なくとも四十年前はそうだった。共和宇宙最強を誇る連邦宇宙軍にもジャスミンに比肩できる戦闘機乗りは何人もいなかった。
しかし、ダイアナが求めるものは、それとはまた別の要素なのだ。
空のままの操縦席を見下ろしてみる。
この席にはいつもあの男が座っていた。その後ろ姿を思い出しながら、操縦席の背に手を掛けながら、ジャスミンは言った。
「ここに座れるのは、わたしの知る限り一人だけのはずだ。あれから四十年が過ぎて、今はあの男より優秀な操縦者がどこかにいるとしてもだ。あの男がまだ生きている以上、おまえが他の誰かをこの席に座らせる理由はどこにもない」
「わたしは正式にあなたに譲渡されたのよ。そんなこと気にしなくていいわ」
にっこり笑って言う顔はとても魅力的だったが、ジャスミンはその笑顔の裏に違うものを見たらしい。
何とも言えない苦い顔で言った。
「しらじらしいにも程があるが、わたしがおまえの所有者だというなら、いいか。これが最初の命令だ。おまえの全性能を最大限に発揮して可能な限り早くあの男と――おまえの前の所有者と合流しろ」
「了解」
「そしてもう一つ、これが最後の命令だ。あの男と合流した時点をもって、わたしはおまえをあの男に譲渡――もとい、叩き返してやるからな。わたしの船としてのおまえの唯一の使命は、わたしを一刻も早くあの男のところまで連れて行くことだ」

ダイアナはそれはそれは楽しそうに笑ってみせた。
「だからわたしはあなたが好きなのよ、ジャスミン。気を遣ってくれるのは嬉しいけど、今は席について。ショウ駆動機関（ドライヴ）を作動させるわ」
「その装置はまだ動かせないんじゃなかったのか」
「第参号（ザ・サード）ならその通りよ。連続稼働の制御はとても微妙で危険な操作になるから。安全を第一に考える通常の頭脳はまず許可はしないし、実行もしない。だけど、わたしなら話は別」
物騒に笑ったジャスミンだった。
「そうだろうな。それでこそ、あの男の船だ」
楽しげに言ったものの、ジャスミンは頑固（がんこ）だった。
操縦席に座ることだけはとことん拒（こば）み、あくまで立ったままでいいと言い張った。
しかし、これからかなり荒っぽい航行をするのに、そんなわけにはいかない。
そこでダイアナは仕方なく操縦室の配置（レイアウト）を換え、滅多に使わない——と言うより以前の操縦者を迎えてから数十年、ただの一度も使ったことのない——副操縦席をわざわざ据えてやった。
ジャスミンはそれでようやく室内に腰を下ろし、航行に備えて座席に身体を固定したのである。
「この船にもこんな設備があったんだな」
「わたしの船体（ボディ）はもともと量販型なのよ。最低限の設備は整っているわ」
ダイアナが言った途端だった。第二の攻撃が来た。
再び外部スクリーンが真っ白に光る。
連邦軍の軍艦でもこれだけの攻撃に耐え得るのは難しいが、ダイアナは『他のどんな船よりも速く巧みに飛ぶ』という至上命題を掲げる船だった。
当然、そのために必要とあれば、五万トン級の船体（ボディ）には不似合いなほどの戦闘力を装備することも厭（いと）わなかった。
眼を細めながらジャスミンは言った。
「シールドを強化したな。以前とは段違いだ」
「当然よ。あれから四十年ですからね」

「三十五年の間違いだろう。おまえはこの五年間、ずっと眠っていたそうじゃないか」

「そのために目覚まし時計を設置しておいたのよ。第壱号（ザ・ファースト）には一般常識とあなたの治療法の進行具合を、第参号（ザ・サード）には宇宙船と関連機器およびそれらの技術の進歩の度合いを、それぞれ収集して記憶するように設定しておいたの」

「では、第弐号（ザ・セカンド）は何を記憶している？」

内線画面のダイアナは真顔で頷（うなず）いた。

「問題はそこよ。第弐号（あれ）には研究室の監視の役目を持たせておいたの。ジャスミン、わたしは不思議で仕方がないのよ。彼が死ぬまでの三十五年間、この秘密を知っているのはアーニィとあの執事さんだけだったわ。なぜ、今になって、あなたの存在が連邦情報局に知られたのか。いいえ、それ以前に、なぜ彼が自分の蘇生（そせい）を真剣に考え、準備していたことが知られたのか。死者を生き返らせる技術はまだまだおとぎ話のはずなのにね」

眉（まゆ）をひそめているダイアナに対し、ジャスミンは怪訝（けげん）そうに問いかけた。

「今さらそれを知ることに意味があるのか？」

「ないわ。でも、誰が情報を漏洩（ろうえい）したかを特定する必要はあると思うわよ。なぜなら、その誰かはまだ総合医療センターの研究所にいるはずなんだから。あなたがそんな害虫を財閥内に住まわせておいても一向にかまわないと言うのなら、放っておくけど」

ジャスミンは苦笑して前言を撤回した。

「いいや、おおいにかまうな。第弐号（ザ・セカンド）と接触すればその疑問も解けるのか？」

「恐らくはね」

「ところで、そろそろ動いたらどうだ？　このままここにいたら、アドミラル宇宙軍が飛んでくるのは火を見るより明らかだぞ」

「そうね。ひとまず領空宙域から出ましょうか」

ダイアナは今まで『船体（からだ）を温めて』いたらしい。

人間でも静止状態から急に運動をするのは身体に

よくないという資料（データ）がある。船もしかりだ。まして、この船は五年もの間ずっと停止状態にあったのだ。

冷え切り固まってしまった船体を急に動かしたら、最悪の場合、事故を起こす危険すらある。それでも、ダイアナは自らの推進機関に全開の指令を出した。

銀色の船体は大きく身震いすると、五年もの間、小惑星に閉じこもっていた鬱憤（うっぷん）を晴らすかのように広い宇宙空間に躍り出たのである。

しかし、アドミラル防護衛星がこの動きを見逃すはずはなかった。新たなミサイルの群が発射され、それらはまるで生き物のように、先を逃げる銀色の船体に迫ったのである。

副操縦席に座ったジャスミンは何の操作もせず、指示も出さなかった。

通常、こんな状態で船は動かない。人間の許可を得ずに勝手に動き出すような船はない。

第一、そんな感応頭脳が船を管制しているのでは危険で仕方がない。

しかし、ダイアナは違った。楽しげに飛びながらぐんぐん加速してミサイルを引き離した。さらには、長い間使わなかったビーム砲の試し打ちを兼ねて、追尾してくるミサイルを残らず撃破した。

同時にショウ駆動機関（ドライヴ）の作動に入った。

ショウ駆動機関（ドライヴ）は便利な装置だが、万能ではない。使用できる時と場合ははっきり決まっている。

その一つに、障害物（しょうがいぶつ）を巻き込んでの跳躍は非常に危険で、船体破損の恐れすらあるというものがある。

小惑星の破片が飛び散っているようなこの宙域で、ショウ駆動機関を作動させて跳躍に移行することは自殺行為にも等しい。まともな感応頭脳なら決してそんな選択はしない——やろうと思ってもできないはずだったが、ダイアナはかまわなかった。

かつて《パラス・アテナ》と呼ばれていた船は、一瞬にしてアドミラル星系から姿を消した。

2

連邦情報局長官アダム・ヴェラーレンは、その時、惑星セントラルの連邦本部（シティ）にいた。

ヴェラーレンは今年五十三歳になる。肌は浅黒く、眼光は鋭く、若い頃は軍隊にいた経験もあるだけに、今でもがっしりした体軀（たいく）の持ち主だった。

職務上、政治の表舞台に出ることは滅多にないが、連邦情報局は連邦主席直属の連邦安全保障会議にもつながる組織である。

共和宇宙連邦の安全保障や危機管理に関係する諸問題が生じた場合は、ヴェラーレンは主席の参謀（さんぼう）として、また、連邦加盟国の中でも強大な力を持つ大国の内情に詳しい知識を持つ者として、政策決定に関わることになっている。

いわば、共和宇宙連邦という巨大な組織にとって欠くことのできない陰の主要人物の一人でもあった。

この時も、決して公にはできない――だからこそ重要な会合に出席することになっていたのである。

今回の会合を極秘に招集したのは連邦主席本人だ。

ヴェラーレンがこの会合を欠席することなどできるわけはないし、無事に役目を果たすまでは誰にも邪魔をされたくなかった。部下たちにも会合が終了するまでどんな呼び出しにも応じないと言い渡しておいたのに、緊急の呼び出しが入ったのである。

ヴェラーレンはその知らせを同伴していた自分の側近から受け取った。

「何事だ？　この会合が済むまではどんな連絡にも出ないと通達してあったはずだぞ」

「そ、それが……」

気の毒なのは伝令を引き受ける羽目になったこの

側近だろう。ひたすら恐縮し、冷や汗を掻きながら、声をひそめて言った。

「自分も後にしろと言ったのですが……、D1のヘニングスからなんです。『彼』に関して何かその、重大な進展があったとかで、是が非でも、最優先で長官におつなぎしろと……」

ヴェラーレンの顔つきが一変した。大事な会合に臨むところを邪魔された苛立ちは一瞬で消え失せて、恐ろしいほど真剣な顔つきになった。

「わかった。部屋で取る」

連邦本部には情報局の事務所がある。もちろん、部外者は立入禁止の場所だ。

ヴェラーレンは足早に事務所に赴き、部下からの通信に出たのである。

外線画面の中で待っていたヘニングスは傍目にもじりじりした様子だった。一刻も早く、このことを上司の耳に入れたいと思っていたのだろう。

その慌ただしい報告を受ける間、ヴェラーレンは一見したところは冷静を保ち、一言も発しなかった。話を遮ることも疑問を挟むこともなく、ただ一言一句を聞き逃すまいとばかりに、真剣な表情で耳を傾けていた。

ヘニングスが息を切らしながら報告を終えた後も、ヴェラーレンはしばらく無言で眼を光らせていたが、やがて慎重に言葉を発したのである。

「それは、本当に――彼なのか？」

「少なくとも……個体情報は完全に一致しました」

ヘニングス課長は玉のような汗を浮かべていた。上司に大事な報告をしている最中だというのに、さっきからひっきりなしにその汗を拭っている。

「で、ですがその、問題が一つありまして……」

「何だ？」

「か、顔が違うんです」

ヴェラーレンは眉を跳ね上げただけで疑問を示し、ヘニングスは慌てふためいて説明した。

「今も申し上げたように、その男はどう見ても三十

そこそこなんです。長官もご承知でしょうが、彼が初めて公の場に姿を現したのは九四六年――結婚発表の席でした。その時の映像は今も残っています。見比べてみたところ、年齢や体格は一致するのに、顔だけが……まったくの別人なんです」

「その件に関して本人は何と言っている？」

ヘニングスは蒼白な顔でぶるぶるっと首を振った。怯えきった野良犬のような顔だった。

そんなことはとても訊けないというのだろう。

ヴェラーレンにもわかっていた。これは一課長のヘニングスの手に負える事態ではない。自分が直接、出向かなければどうにもならない。

「その男から眼を離すな。すぐにそちらに向かう」

こうして極めて異例ではあるが、ヴェラーレンは連邦主席の招集した会合をすっぽかして、宇宙港に向かったのである。

恐らくは連邦主席の招集した会合を欠席した初の情報局長官だっただろう。

やがて会合に現れた主席がヴェラーレンの欠席を知って驚いたのは言うまでもない。情報局の代表がいなければそもそも会合が始まらない。

すぐさま呼び寄せるように部下に命じたが、その時にはヴェラーレンを乗せた船は惑星セントラルを離れ、一路、小惑星帯を目指していたのである。

情報局長官という身分の彼には専用の宇宙船が用意されていた。隠匿性能も備えた優れものである。

行き先は秘密にしなければならなかった。

Ｄ１こと《ダイダロス・ワン》はセントラル星系の小惑星帯にあるが、これは極秘であり、この小惑星帯自体、一般船舶の立ち入りを禁止している。

情報局はその管轄官庁でこそないが、連邦の組織であることには違いない。それなのに、その長官が立入禁止宙域にのこのこ出向くところを見られるわけにはいかないのである。

宇宙に出たヴェラーレンは意外な指示を出した。

「Ｄ１に連絡だ。その男と話をしたい」

と言うのである。
部下はこの指示を受けて、訝しげな顔になった。
ショウ駆動機関の普及した現在、セントラルから《ダイダロス・ワン》まではほんのひとっ飛びだ。
何もわざわざ通信で話さなくても、もう一時間かそこらで、その男と直接、顔を会わせることになる。
それなのに何故——という思いが顔に出たのだ。
長官には部下に思惑を説明する義務などはないが、この時のヴェラーレンは自分に言い聞かせるように、ゆっくりと言葉を綴った。
「その男が本物であるという証拠はどこにもない。個体情報が一致したと言っても、特異能力者が彼になりすましている可能性もある」
「まさか。そんな能力を持つ者が実在しますか？体組織をすべて変えなければなりませんが……」
「そうだ。一昔前ならそんな能力は非常識の一言で片づけられるものであり、おとぎ話に過ぎなかった。しかし、今や、絶対に存在しないとは断言できない。その男が能力者なら、顔を会わせたわたしの思考を読んで話をする恐れは充分にある。これだけ距離が離れていれば、さすがにわたしの思考を読むことは不可能だろうからな。本物か、贋物か、今のうちにある程度の確認はしなければならん。D1を呼び出すんだ」
「はっ！」
部下は直ちにその旨を船橋に伝えた。

《ダイダロス・ワン》に正面から乗り込んだ男は、貴賓室のような豪華な部屋に通されて、のんびりとくつろいでいた。
男の前には発泡性の白葡萄酒を満たしたグラスが置かれている。
いやがらせのつもりで呑みたいと言ったら本当に出てきたのである。それもそんじょそこらにざらにある品ではない。食通の好むような最高級品だ。
おもしろくなった男は次から次へと高価な食材を

注文してみた。
　それらの食材を正しく調理するには相応の腕前の料理人が必要となる。まさかこんな場所で味わえるはずはないと思ってのことだったが、これまた意外なことに、とても庶民には手の届きそうにない豪華な料理の数々が高級レストランよろしく、ずらりと目の前に並んだのである。
　ここは連邦の秘密基地のはずなのにだ。
　男はわざとらしく嘆息して言った。
「呆れたもんだ。俺の支払った税金でこんな贅沢をしてやがったのか？」
「は……いえ、その……」
「これじゃあ、善良な市民の皆さんに税金泥棒と非難されても、一言も言い訳できねえな」
「ご、もっともです……」
　何の因果か、男の相手を引き受けるはめになったトラウト主任もまた、びっしょりと汗を掻いている。
　さっき軽く食べたばかりではあったが、せっかく出してくれた料理を無駄にするのは心苦しい。
　男が料理を口に運び始めると、ヘニングス課長が慌ただしくやってきた。
「恐れ入りますが、外線に出てくださいますか」
「だったらこんなに運んでくるんじゃねえよ」
　文句を言いながらも、男は壁の一面を見上げた。
　そこには古風な風景画が掛かっていたが、不意に絵が消え失せた。ごく短い待機状態の後、変わりに映し出されたのは髪を短く刈り込み、身だしなみの整った、いかにも意志の強そうな男の顔だった。
　その顔を見た男は、笑って話しかけたのである。
「やあ、アダム。久しぶりだな」
　男の口調は親しげだった。朗らかで、屈託がなく、よく知る旧知の人に話しかける時の口調だったが、ヴェラーレンには咄嗟にそれが誰かわからなかった。
　穴の開くほど男の顔を凝視した。
　まったく見覚えはない。懐かしさも感じない。
　それも当然で、どう見ても自分より二十歳は若い

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。